論文の和文要旨

論文題目	上海語変調の音韻的構造
氏名	髙橋　康徳

本論文の目的は【1】(新派) 上海語で観察される2種類の変調 (広用式変調と窄用式変調) に関する未解決の問題を音響音声学的なデータにもとづいて考察した上で、【2】それらの考察を総合して上海語変調体系の解明を試みることである。上海語では 1980 年前後から生成音韻論を用いた変調 (主に広用式変調) の分析が行われてきたが、生成音韻論だけでは分析することが難しい変調の問題や上海語変調体系の全体像に関する問題の考察はこれまで十分に進められておらず未解決のまま残されている。しかし、これらは決して周辺的な問題ではなく、むしろ上海語および漢語全体の声調音韻論の包括的な理解のためには解決しなければならない重要な問題である。そこで本論文では、従来の音韻的研究が解決できなかった上海語の広用式変調と窄用式変調の問題を新たに収集した客観的なデータにもとづいて解決し、さらにそれらの考察を総合して上海語の変調体系の全体像の解明を試みる。

まず、第1章では本論文の背景となる情報を概説する。上海語には広用式変調と窄用式変調という2種類の変調が存在する。広用式変調は様々な語・句構造に適用される。この変調では第1音節の声調が語全体のピッチを決定する (つまり、この変調が適用される語では第2音節以降の声調は語のピッチの決定に関与しない)。一方、窄用式変調

は動詞＋目的語、主語＋述語などの一部の句構造のみで適用され、曲線声調（音節内でピッチが変動する声調）が水平声調（音節内でピッチが変動しない声調）に変化すると従来の記述では報告されている。第 1 章では従来の音韻論的研究による広用式変調の分析を略述した上で、これらの研究には【1】主観的なデータに大きく依存して考察を行っている点、【2】生成音韻論の枠組みだけでは分析できない問題が未解決のまま残っている点、【3】上海語の変調体系の全体像に関する考察がほとんど行われていない点という 3 つの問題点が存在することを指摘する（窄用式変調の分析に関しては第 5 章で述べる）。また、これらの問題を解決するために本論文が採用したアプローチ（音響音声学的データにもとづいた各変調の分析、および各変調の分析を踏まえた上海語変調体系の全体像に関する考察）に関して第 1 章では説明する。

第 2 章では、上海語の変調に関する従来の音声学的記述と音韻論的分析に関して詳述する。本研究の考察対象である新派上海語は、1970 年代にアメリカの研究者によって広用式変調の変調型（変調が起きた時のピッチ型）が初めて体系的に記述され、1980 年代には中国の研究者によって広用式変調と窄用式変調の変調型が詳細かつ体系的に記述された。また、1980 年前後から自律分節素理論と韻律理論を用いた上海語の広用式変調の分析が行われており、現在では【1】声調削除、【2】声調連結、【3】（デフォルト）Low 声調の挿入という 3 段階の音韻操作からなる解釈が広く受け入れられている（一方、窄用式変調の分析は数が少ない）。本論文では、上記の 2 つの理論を概説した上で、これらの理論を採用した先行研究がどのように広用式変調を分析したのかを詳述する。

第 3 章では上海語の広用式変調で観察される変調変種の出現分布を調査し、どのような要因が変種の出現分布と関わっているのかを考察する。上海語では陽入（T5）が第 1 音節となる 4 音節語に広用式変調が適用されると、「第 2 音節拡張変種」と「最終音節拡張変種」という 2 種類の変種が出現することが従来の記述によって報告されている。従来の研究の多くはこれらの変種は自由変異の関係にあると解釈するが、これまで変調変種の出現分布は客観的かつ体系的には調査されてこなかった。そこで、本研究では【1】形態統語構造と【2】文の種類（叙述文と疑問文）の違いが変調変種の出現分布に影響を与えるのかを調査した。調査の結果、T5 が第 1 音節となる 4 音節語では上記の 2 種類の変調変種に加えて、「2+2 変種」という第 3 の変種が観察されることが明らかとなった。また、これら 3 種類の変調変種は形態統語構造の違いによってその出現分布が大きく偏ることが判明した。具体的に言うと、「最終音節拡張変種」は調査した 4 種類の形態統語構造の全てで出現したが、「2+2 変種」と「第 2 音節拡張変種」は（1 例を除いて）「〇〇大学」のような「2 音節＋2 音節」からなる複合語（「2+2 複合語」と呼ぶ）

でしか現れなかった。以上の結果は、変調変種の出現分布が形態統語構造の影響を直接的に受けていることを示唆する。本研究ではさらに、なぜ「2+2 変種」と「第 2 音節拡張変種」が「2+2 複合語」でしか現れなかったのかを、韻律的な観点（「2+2 変種」）および上海語変調の通時変化の観点（「第 2 音節拡張変種」）から考察する。

第 4 章では、3 音節以上からなる語で広用式変調が適用される際に挿入されると考えられているデフォルト声調の音声実現と音韻解釈を行う。広用式変調は第 1 音節の声調が語全体のピッチを決定するため、第 2 音節以降では声調の区別が完全に失われる。従来の分析は広用式変調が起きる語の第 2 音節には第 1 音節の声調が拡張し、第 3 音節以降にはデフォルトの Low 声調が挿入されると解釈する。言語一般のデフォルト声調に関する議論によるとデフォルト声調は音韻レベルから音声レベルまでの複数の段階で挿入される可能性があり、挿入される段階によってデフォルト声調の音韻的振る舞いや音声実現が異なるため、デフォルト声調という概念を用いる場合には音韻派生のどの段階で挿入されるのかを明確にする必要がある。しかし、上海語の音韻的研究はデフォルト声調が挿入される段階について十分な議論を行っていない。そこで、本研究では広用式変調が適用される 3 音節語と 4 音節語のピッチを音響音声学的に記録した上で、これらの結果にもとづいて上海語のデフォルト声調がどの段階で挿入されると解釈するのが妥当なのかを考察する。調査の結果、上海語のデフォルト声調は（北京語や上海語の）語彙的に声調が指定される音節（非軽声音節）と類似の音声実現を見せており、音声レベルでピッチターゲットが指定されると考えられる北京語の軽声音節の音声実現とは異なることが判明した（これは従来の記述とは異なる結果である）。これらの結果を踏まえた上で、本研究では上海語のデフォルト声調は遅くとも音韻レベルの最終段階までには挿入されると解釈する。

第 5 章では、窄用式変調が起きた音節のピッチを音響音声学的に記述して、この変調が音声的な現象なのか、それとも音韻的な現象なのかを考察する。窄用式変調は動詞＋目的語、主語＋述語などの限定された句構造のみで適用される。従来の記述はこの変調が適用されると曲線声調（音節内でピッチが変動する声調）が水平声調（音節内でピッチが変動しない声調）に変化し、T1（陰平）と T2（陰去）が[44]という同じ調値を取ると報告する。従来の分析では、窄用式変調を【1】発話速度が速くなるにつれてピッチの幅が連続的に縮小する現象とみなす音声的な解釈と【2】ストレスに起因した水平声調化と声調の中和現象とみなす音韻的な解釈が提案されていたが、窄用式変調が起きた音節の音響音声学的なデータがこれまで一切収集されてこなかったため、どちらの解釈が妥当であるかを判断することは困難であった。そこで、本研究では窄用式変調が起きる環境において上海語の 3 種類の曲線声調が異なる 3 つの発話速度でどのような音声

実現をするのかを音響音声学的に記述し、その結果をもとに上記の2つの解釈のどちらが正しいのかを検証する。調査の結果、3種類の曲線声調のピッチの変動範囲は発話速度が速くなるにつれて小さくなるが、少なくともT1（陰入）とT3（陽去）ではピッチの下降（T1）および上昇（T3）が全ての発話速度で維持される傾向があることが判明した。また、音韻的な解釈では中和が起きると考えられてきたT1（陰平）とT2（陰去）の間には（1名の発話者を除いて）全ての発話速度で有意な差が存在することが調査結果から確認された。以上の結果は、上海語の窄用式変調が音声レベルで起きる現象であること、すなわち音韻的な解釈ではなく音声的な解釈が正しいことを示唆する。

第6章では、第3章から第5章の議論を総合して広用式変調と窄用式変調が上海語の変調体系をどのように構成しているのかを考察する。第3章から第5章の議論を踏まえると、上海語の変調体系は以下の4点の特徴を持つと解釈できる。【1】広用式変調は音韻的な変調であるが（変調変種の出現分布などで）形態統語レベルの影響も受けること、【2】広用式変調はデフォルト声調の挿入も含めて音韻レベルまでで処理が完結し音声レベルとは関わらないこと、【3】窄用式変調は音声レベルの変調であること、【4】広用式変調と窄用式変調はそれぞれ別のレベルで独立して存在すること。本研究のように客観的なデータにもとづいて特定の言語（もしくは方言）の変調体系を実証的に考察した研究はこれまでほとんど行われておらず、声調研究において本研究は新たな研究指針を示したと言える。